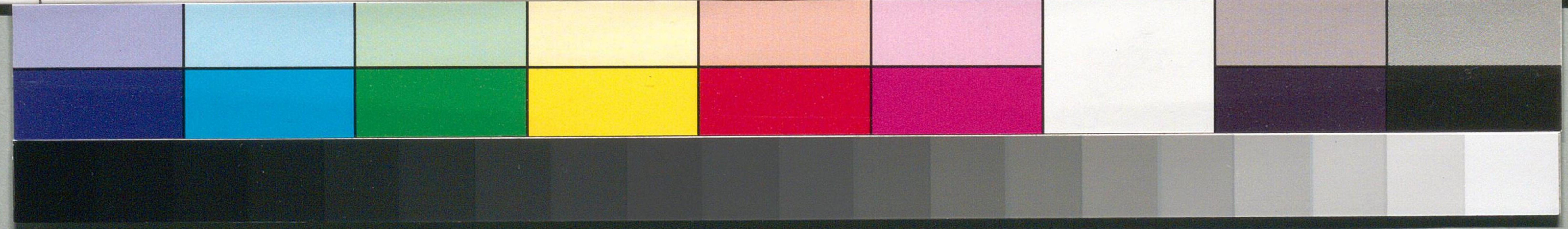
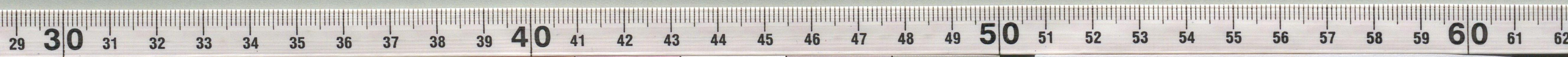
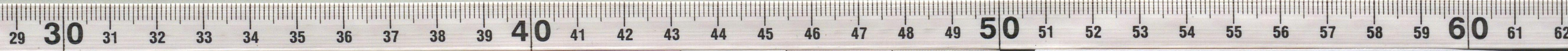


有込古塚之庄分也
不齋小御者之御
以直披



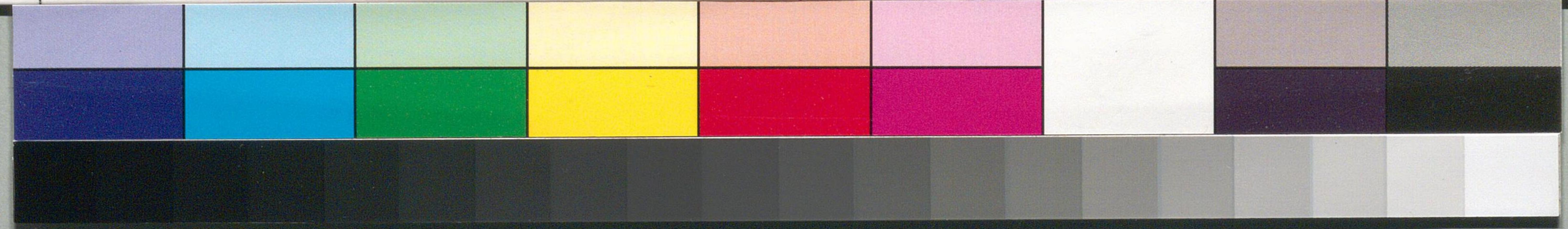
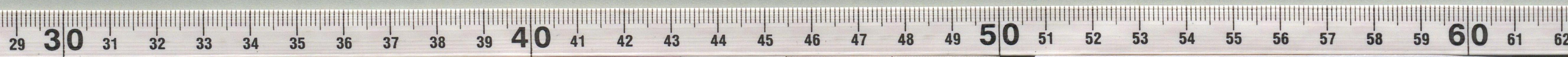
明治九年三月
高田村
大森金五郎



国立国会図書館 水野直関係文書 134-4

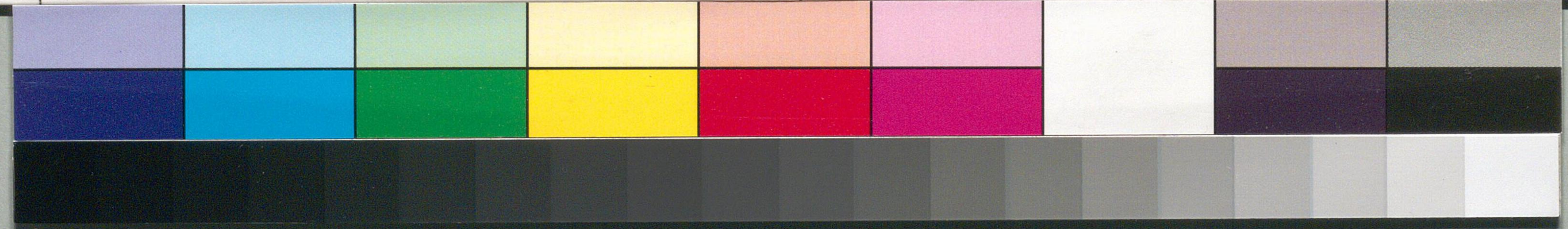
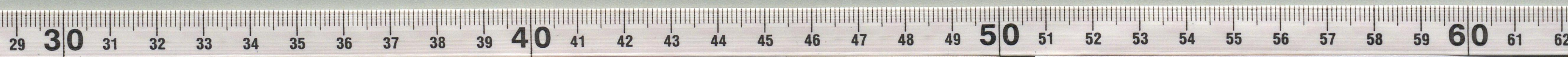
No.

二つ式と稱するは、夫より客色並之輔仁會の附設評
 議委員として水上部委員（晩年）の附設委員なること
 右の如くある譯なりとの事。目下水上部の諸氏は
 大にのみみたり。来る年などは是れ使用一徳（或は
 少部）の諸氏も要する。此等あり。水上部には
 基金人之一と云ふものあり。此部を仲介する
 ための諸氏が、諸氏と共うて諸氏の諸氏
 の計画あり。柳子（子）の諸氏（子）の諸氏
 右の福岡子（子）の諸氏（子）の諸氏
 柳子の諸氏（子）の諸氏（子）の諸氏
 柳子の諸氏（子）の諸氏（子）の諸氏



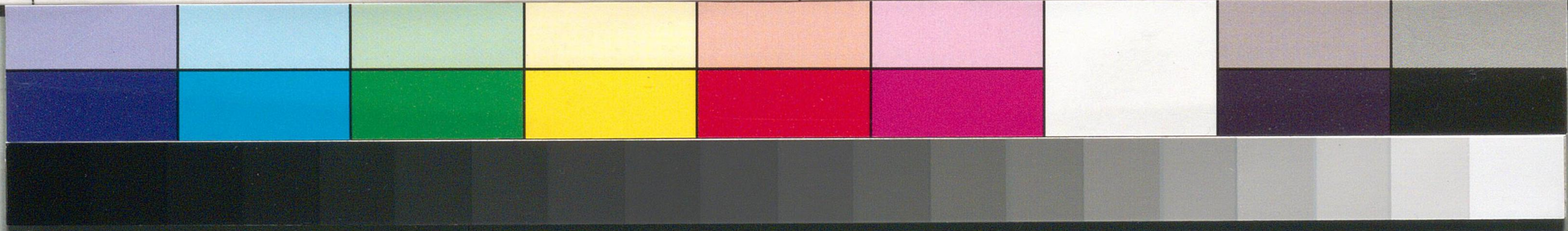
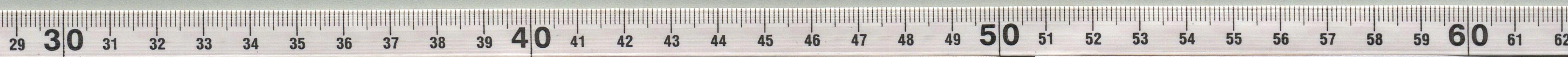
No.

昨年なれば瑞穂の子をいふと聞着を
 死したこやい何れも今又容るを
 信しつたお金の相違を括入むなり
 勝りすの押録せらる
 此のわが君舎に三宅某とや副議長
 と云ふ事鳥羽氏の部下に居たるが
 其助於令も悪く鳥羽氏を圍りたるに
 其人の部也の事おの都合が伊れに
 改せり五宅の副議長と成りたり
 死るに一年も居りや居らぬ又
 五宅の事と折合ありおれり今更
 は健長より又此書地事おの事
 文原三宅氏を云ふ事と云ふ



No.

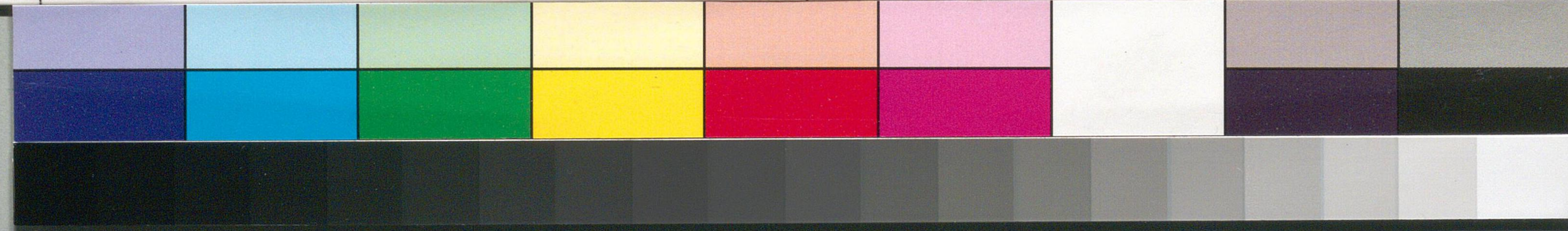
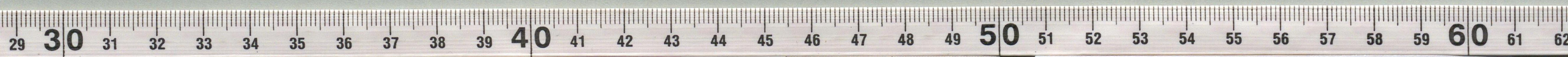
此の如き鳥や女は自ら引くかを存け
 ぬは回毛と部下し置かぬは存らぬ事と在ぬ
 目下動る中の様子 結局 六条外復帰あり
 とありぬべく 院長はよはらぬに在りぬ
 押の事は平義をせらるゝ事と在りぬ
 院長は何と思ひてか 十日計以新より 院長官舎
 を明けし他に殺害せし由に在りぬ 右は女中な
 る事とありぬか 案の早き者は院長の命を
 危す下地かなり 或者は遺屋男高の内
 院長の候神を物色し 居りやと在りぬ
 し院長は中の音易に自ら引くを引くや



No.

是を以て培ふに
現立の教授法の
華語教育の
の習得を以て
其の目的を以て

此の如きは健康を以て
保つて置くべきなり
仰ぐ一位置として
中の一位置として
是の如きもの



No.

實多しく外^内文部大臣の口授り行なる也や
 表一 吾はなるに教員が教職に任命せらる
 ことと仰はば佐々木と仰い 在りしより
 は今後は職務につくが 或は定内者の中位に仰
 用せらるる程の事 出陣中仰い 是方格
 かきり 仰い 仰い 今後は学向甚お
 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い
 高等師範を成すに外 高等女子を
 子傳せし 夫等も力 或は講師と
 出づる事 仰い 仰い 是も
 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い
 の事 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い 仰い



No.

何事かの人を、之は愉快に感ずるに、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

明治九年十月十八日

水野直

水野直の如く、
其の如く、

